

1月22日(土) 午後3時 ギャラリー・ガラ  
小田急線 梅ヶ丘駅下車 徒歩2分

講師：ナオ（稲垣尚友）

「呑みこむ」行為は島に限られたことではない。他人の発言を理解しようと試みる限り、呑みこむことも、その逆に、いちどは呑みこんだつもりでも、消化不良をきたして、吐き出すことも、日常のこととして行われる。

たとえば、島の外から耳新しいコトバが入ってきたときなど、それをどう理解したらいいのか、知恵を働かせる。子どもはこうした手順を踏む場合が多い。島は、経験領域の狭さからか、知恵が先になる場合は限られている。

たとえば、発電機という利器が島に入ってきたとき、中之島では電気を「点（つ）ける」であるが、臥蛇島では「明かす」である。平島では電気は「焚く」ものである。

中之島は森林が発達しているから、薪の入手が容易である。また、集落の近くで温泉が湧き出しているから、風呂を焚く燃料は不要である。それと、標高千メートルになろうという山岳の麓からは豊富な水が湧き出していて、水力発電が昭和三十一年には始まっている。

臥蛇島では昭和十五年に灯台が建設され、始めて電気が起こされた。そこでの点灯を、「灯台の火を明かす」と表現した。各家庭に電気が配給になったのは、それから二十余年後であり、電気は灯台のためのものでしかなかった。藩政時代に臥蛇島で山火事が起こり、狼煙を上げて隣の中之島へ知らせたことがある。その島には島津の城下から派遣されていた在番が詰めていたので、知らせを受けて、飛び舟がやって来たことがある。そうした歴史があるから、灯台の灯りは狼煙と同じで、海上遠くへ情報を届ける「明かり」だったという認識が強いのではなからうか。

これとは違うのが平島である。島は山が浅く、燃料として多用する竹も集落周辺のを伐り尽くしている。流木拾いは、建材目当てであり、同時に燃料確保のためでもある。薪集めは子どもらの大きな仕事であった。風呂、カマド、イロリの燃料は「焚く」のだから、薪のことを「焚きモン（物）」と呼ぶ。

そこから出発して、プロパンガスが鹿児島からもたらされたとき、「ガスを焚く」と表現し、重油を燃料としての発電も、「電気を焚く」となった。水力発電をする中之島では思いつかない表現である。

以上はコトバの呑み込み法の一例であるが、宗教にしても、教育制度にしても、あるいは、外から渡ってくる入り込みに人の扱いにしても、島特有のものがある。この項では、いくつかの事例を採りあげて、より具体的な知恵・思考法を述べてみたい。